



Title	黄海道瑞興県月灘星部落
Author(s)	鈴木, 栄太郎
Issue Date	1966
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/77417
Type	manuscript
Note	農村社会調査野帳抜書。手書き原稿、39頁。;資料作成年不明(システムの制約のため、発行日には没年を入力した)
File Information	B013_0209.pdf



[Instructions for use](#)

豊後守 調査 野去 友 著

黄 海 道 瑞 興 郡

月 濱 里 部 落

3049.

○ 共同 寺 御 地 域 (ツレ、ソ、ハ、ミ、コ、チ、ウ)

瑞興里・瑞興

○ 結婚 尚 幼 年 婚 習 存 在 行
結婚 年 齡 妻 年 齡 兩 婚
産 兒 數 限 双 生 也 母 胎
乳 幼 兒 の 養 育 年 令 未 足 視
主 田 妻 婦 人 の 化 節 注 意 の
加 少 年 令 婚 止 婚 作 婦 人 の
煙 酒 分 亦 分 居 合 生 活
居 住 妻 の 養 育 数 少 一

672

共同労働組

○ツレは此地方にはない。海岸地帯の労働地

帯にはワレ所ある。此の労働地帯は故に

甘一牛やもない。盛夏の次の洗脚場の如きもの

のもない。労働のところが夏に多いのは

ある。田作のところには除草後収穫までの間

に拍子音は賑わい。五月の間に夏の賑

やかな行ふ身も労働のところがはるかに

ある。四月十九日(新)十月二十日(新)の府民祭

の賑わいは村中伝ふ。酒宴をほり牛馬の殺

したぬ、その吹土乾しい時である。洞窟の空

期層は休みの十月五日。酒壺もある。

ロソバ又い

ソソバ又いはプロマシと(同)である。

ソバ又いは何事によらず細末水である。粟子又い

なく家事のソソバ又いである。餅の漬物は女

達でソソバ又いである。尾根は男大

のソソバ又い。男女混入してソソバ又いである

お事多い。男女は字種である。

牛のぬりソソバ又いを鋳造する。水たまり

合かよくあ。此巴の畑は守り牛耕に。の

とあな。牛耕には牛エーソソホリとあお古束

の物を用あ。牛エソソおしは二頭^ルの牛を用

あさのい。か。大抵の原には牝牛一頭を飼

つ。牛かか。と。他^の原^に牛を借り

つ。水は。そ。白か。ソソバ。又い

つ。此巴の地積累位は。マナキとハルカリ

つ。マナキか。ハルカリ。ハルカリと

は。一日耕とあ。牛エーソソおりによ

は。一日耕とあ。土地の良否によ。面積は

畝、大作二千坪位、不標半、ア、。

為戸、飼、石、田中は大部分畜産組合の

牛、是れを給か、石、ア、一年又

は二年、仔牛一頭を生む。是れを四、乃至九

十、田に賣り、之の半給は飼、之、他の半乳

は、組合に送、子に給、石、是れが自か、

新、石、石、牛、か、老、衰、し、石、給、合、に、し

給、合、に、送、子、に、給、石、。

ま、畿道安城地方

いは昔凶時に金

や物や芳力で

贈り物を了り

をフケユ一と云ふ

字附の意いふ

か、しつと記しおか

す。僧侶や寺

に對してはフケユ一

と云ふ語を用ふ。

全北金州地方、

近代で芳力や財物

を贈付する事を

フケユ一と云ふ。

賦役は官命によ、一芳力を借給付す。

コケウ

コングルと云ふ言葉はこゝにない。コケ

ウとは無償銀花勝の意いふ。コケウは

困、字の爲にルヤトは世に原、字の爲に

や。コケウの規模は概々いふ。新落

の香力名、字を建、時々いふ新落、今

ケウす。その時心は遠く盛、心酒者、を

し、名を謝す。知しコケウの盛、心規模は

新落の地、こゝに他、即、夜、の、若、加、ほ、

コケウを新、お、梅、友、事、は、な、い、人、年、か、無、く、

(表) 宋の爲に近降致れぬコトウを行お塔合

はよくあふ。コトウは漢字に以孝底と書く

のこあさうと康^は氏の送り字。底は元の意

元は情に通すよと云おのてあふ。

日 結婚式の時の接印

孫 婚式の時には新嫁の人は誰のあふ新は皆

手 傳いにあふ。皆泊り正あつて二三日あ

か さい日晝と夜夜なく甲斐志の草師をす。女はを

乱の草師。多かり肥毛を伝ふ。栗の皮もおく

26 11

P.

の七時了と、紅車いす。ピシ、トクを作

りに仕度あて、庭の作。手帳のいす、ワ、靴を

を履、ス、遊ん、り、不。為に北人は余分に集

まよ。鶴も何羽か新、小葉酒、作、小よ。

却、外、の、名、は、合、ない。

- 一、結婚年齢
- 一、結婚年数
- 一、結婚費用
- 一、結婚儀式
- 一、分家分産

（結婚費用）
 財力、地域、身元、結婚費用、結婚儀式、結婚費用

出産の回数、結婚年齢、習俗慣行

結婚年齢

今より十数年、まは男は十二三才、女は

十七八才位で結婚した。然し十二三才で結婚

した山三四年間には子室上の夫婦間には余りな

かった。姑か居る場合には、三四年間には若

夫婦は言葉も交はさず、場合が多かった。観

念老人も十五才の時十九才の妻を迎へたか、

直接に口を交はし、そのは一年後になつたか、

つたか。昔は子供か養育したのはその父か十

七才以後になつてかゝつてゐる。結婚して

年向位は新婦は強か、一才七才外に在り、事は下

かつた。 低く

昔は身（身）や財力の豊かぶ栄冠、結婚年齢は ~~高~~

かつた。 ~~此~~ 時に於いては、一級市民忠実には、

男は二十才前に結婚した。然し、投資の家には

二十才を越して居る。故に一級に兩現には男

か、女より年 ^高 位 ^が、市民には男か女より年

位 ^が 高いのか、一級に在る。

十五才の時結婚して、當時十九才の妻を思へ

大余田某氏は、
自乃か
十位にたつて、宗門はす

つかりお染まるといふこと、
しきりしきりしきり

こゝろは、いかんといふこと、
歌謡しつしきりしきり

と或は酒宴の席に、
りしりしりしり

最近、
十数年來は結婚年齢が若しく、
結くれ

、男二十才女二十才で結婚するものが、
善色と

たつた。そして、
満二年間に子を産む孫になつ

た。然し、
一年來は又早婚になつた好む者。

彼等の如く、
宿願に倣つて、
種々女をとり、
ありあり。

兵衛前、
子と申す。子供、
大早く産み、
しつし。

姓

年次

といふこと。

以上の諸事考へると、郭新に於ては、出産 ~~年~~

は十数年を経過し、上界に於ては、一時

度 数 年 次 に 下 し た り 相 違 ひ な い 。 そ の 如 き

故 因 に し て 年 を 不 下 指 に な す 。 か ら 。 又 来 年

あるに、上界が延 び 小 の 。 あ ら う 。

然し、その 結 は 兵 隊 の 属 ゆ か 。 又 下 界 。 あ

らう。

然し、十 年 を 経 て は 妊 婦 の 年 次 に 上 界 に 始 め ら

と、し て は 急 激 に 下 界 に な り 。 さ ら に は な く

際の年を追ふて変更して来たとはいふ

るの破れは縫い直しに現れ小口へかき直しぬ。又

全体的に云へば結婚年齢の上昇は七つと前か

ら二つあり。然し最近に於ては徴兵制の影響

による結婚年齢の低下は、二水は二三年甲よ

りや、の破れに現れ小口へかき直しぬ。

○喪章

親の死して服喪中に子を産む事は、別に

罪にはならず。之を、其子は喪章を捨て、西

階階にはきき、つて所を。然し常長に夫の

全く同じにたか、と。然し恐らく百歩信も

かゝる西階階にたか、と。西階階は錦水

喪章の同題にす。親の事はたか、と。たか

。現在にたか、と。は喪章を水鼓す。故に考へ

は念知有し、と。此如月には墓墓に親、

と人たか、念知活し、と。向かない。

〇 再婚

前妻が死亡すれば其喪中に以縁造かある。

特に全財産の子もない場合は、前妻が

死亡して同じく後妻を迎へる。昔から妻を

亡くした男には遠く再婚をすゝめ考へるが

一般的であつた。

女子が夫を亡くした場合には、昔は念無

再婚しなつたか一般の連てあつた。現在

この再婚階級には、夫の死亡後少くとも二三

年間は再婚しない。昔は二十才の未亡人で

兩婚はしつゝ、今ある凡そ三十年はかゝ

前かゝ女子も兩婚了。事を當此と之は極に

つゝ。

拍子に於ける過剰の人口増加率より推察し

二婚率を卜す。場合、女子兩婚の増加は

今に於ては、可なりと云はれり。

香山洞を以て
 修飾物の
 裝飾とすべし
 か

○人工制限の習俗

博覧や穀の習俗と云ふ
 博覧の習俗

○不義の子を殺す事有るは此の世では数千年

未だ、死すは無い。多きは貧困に依りて

死すは死す、然るに水の上考へて事有る。

〇 双生児に祈りよ奉へ方

双生児か生れし時以芽出たしと云はれし

片よ。一人を先養と云ひ一人を後養と云ふ。

双生児か生れし時以二人に以て養ふ多く有へ

〇 匹若さんか先年双生児を生んて。双生児以

何か。何事と同いふか。用おし子になつて居

〇 結婚式同日に御お可及。左と右は女と居

〇

○母乳

乳がよく出る場合には三神に祈る者があ

る。乳が止まる場合には、他の婦人の乳を貰いに

廻す様な事は無い。近所に余った乳を貰って

片よ人か、片よ片よ双方の乳を貰うために、その乳を貰

ひのやませよ。

母乳の代用として、は、P、M、N、Y、（重湯お粥）で

あよ。米又は粟を原料とする。乳の代用とし

ては、これ、（大）、あよ。乳がよく出る食物として

は、（専）、昆布、（若）、（メ）、（意）、（い）、（り）。肉と共に、（醬）、（油）、（で）

のお
汁にしろ食ふ。其は余り用いぬ。産婦は

産後一般に一週間は安静すよ。

〇乳幼児の疾病手当

昔は乳花より乳幼児の死に多かつた。昔

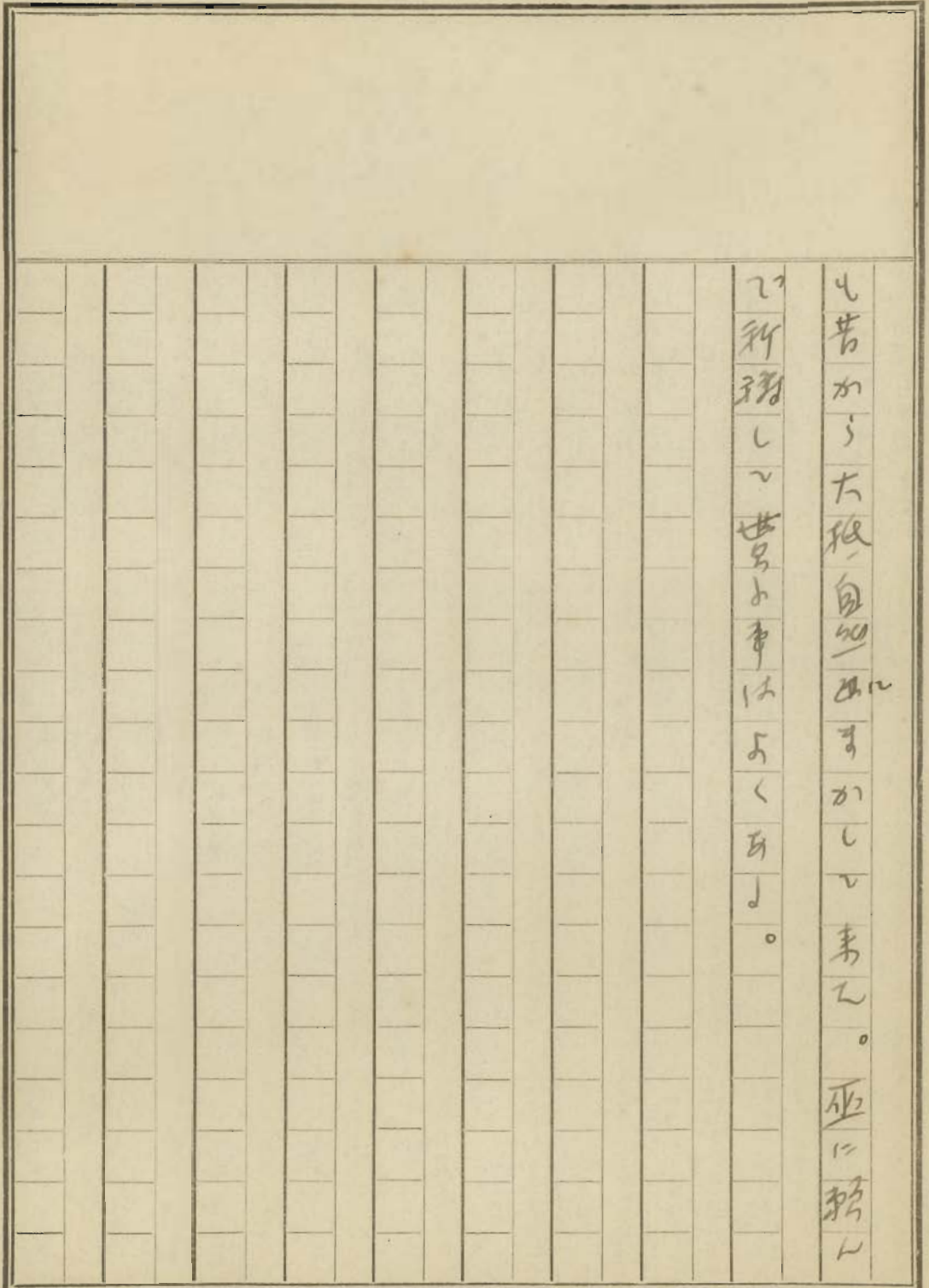
は乳幼児の病氣に甚しき者も少く、病氣に全無

く、全く自然に消えたり。故に五才位迄

ては人同の數に入らぬ。凡てあつた。乳

花には全か。若し直接に病氣に行き、病

者は向の澄明書を世に置く。耳や目の病氣



○ 出生祝

お生後一年子は何の祝もない。但し厄年に

生かぬ者丈には百日目に厄抜いをしてやよ。

是れはじやくサルゾリ(百厄抜い)であよ。近所

かゝ順次百戸の衆を廻つて餅の材料を貰ふ。(少レゾリ)

大抵姑が廻よ。是れで色々の雑穀を貰ふて餅

を作る、巫女を呼んで内房で午後八時迄かゝ

厄抜いの杖サレゾリいもやつて貰ふ。その時には近所

の人お足物(靴)に素よのサレゾリのあてて餅は近

所心くはよあ、子供等には念のたぬ事にな

二層^だ。その鏡には厄^{やく}がつけ^ついて^いて^あ

だ。蘇^じ井^やの井^いに^いり^て、井^いに^いり^て、井^いに^いり^て

材料を貴い集め^ある事はよくある。その事を才

い^いと^いふ。

因^いに、結婚^{けっこん}の式^{しき}の前^{まへ}に、新郎^{しんがう}新婦^{しんぷ}の同^{どう}に^いは

両^{りやう}宋^{そう}の同^{どう}に^い何かよくない凶兆^{きゆうしやう}がある。珍^{ちん}合^{がっ}には

巫女^{いづな}を招^{まね}いて^いて^いる。や^やつ^つて^いる。

士^し帽^{ぼう}の式^{しき}は、士^し帽^{ぼう}の式^{しき}は、士^し帽^{ぼう}の式^{しき}

用^{もち}の帽^{ぼう}子^こは、用^{もち}の帽^{ぼう}子^こは、用^{もち}の帽^{ぼう}子^こ

○苦田舎

嫁して三年子無し水は去り法は宗門に違用

す。事は弦と云い。苦田舎の子は地位と財力に

よ、この事情が累つて居る。上流の両班には

い娯樂の爲に妾を置く、故に道徳的には苦田

はよくな。事と云ふは、小の斤。宗習拍子の

意味は、両班親類を求め、下流親類を得る

其小を得たりとす。五十年吟あすは、麻

子は婿子に比し比較にたう以親身が下の女

乙女、上流には妾媵は宗の拍子に用い

子、善小を求むる。故に兩端は、子有りは

拍弦の如く、すく善小の、子有るは、昔は妾の

子には宋智拍弦の、物は、有かつた。然し中等

以下、宋庭には、妾に子有りは、財力有るは

妾を、豊に拍弦の、物は、有無に、拍子、妾の子

を得、宋をつかした。然し、四十年は、かゝる、か

く、鹿小、立流に、拍弦、を、妾に、たつた、か、拍

弦、よ、善、妾の、子、隔、も、つ、は、累つつ、片、よ、今

日、妾を、豊、く、の、は、弦、を、習、う、宋、の、力、を、他、に、弦、よ、為

た、云、つ、よ、い、。娛樂、の、余、力、有、る、事、を、他、に、所

日
為
二
あ
。

○婦人の信仰

婦人が家での祀り神には、三神、オービヤン

、土地神、ソング、七尾宗かあ。山宮に

はあむ色んの神かあ。男か祀りの先祖

の祭と府忍の祭であ。

三神は内房の一隅に祀り、飯三杯、わさび茶

椀に入水、そくに湯(湯は布を入れた汁)も三杯供

へ。これは子供か生れた三日目に母行ふ。

い。新よりはお婆さん(おば)。産婦

自身はあて起す。い。産婦は起す。

かゝ高き有時祈よ。乳か出ぬ時や乳出や病を

をしえ時を^しに^し右の^か病^を形^式に^祈よ。その

時は^ぬ此^に行^ぬれ、^婦も^行ぬ。然^しに^乞ふ^しに^婦

か^祈よ。

子を^得え^いぬ^に三^神に^祈よ。事^はな^い。子を

得^えい^看は^孝心^に行^つに^佛か^三に^祈よ。寺^に

行^つに^凡能^を得^よ。事^はよ^く有^よ。お^寺は^二

、か^ゝ二^足位^の續^令者^に行^く。向^後日^の如^し

有^よ。僧^か時^を其^批鉢^に来^よ。

才^一に^ヤン^は各^戸に^祀つ^に片^にか^二小^は

里作、宋の都の家の為の祀
伊勢に奉る。あり。わい

い、齋に米を入つて祀す。
二斗も祀すの儀あり

女、あまの。オーヒヤンは
菖蒲の儀、わいを宋の

屋敷の形をしつ片す。



土地神はまゝ、代土の
所有名か祀つて片す。

梅祀の儀は、女、あまの。
菖蒲をかぐし、おく儀の

わいを齋に米を入つて
祈す。土地神の祀す

てあよ。

ソシチニハ宗の撰成の時ニ記す。その後宗

の棟に之のま、紙をふりつけりてあよ。記すの

はせりてあよ。

七皇は内房の一隅に餅か飯かと清い水を供

へて祀り。子を侍らひ婦人が自身に祀りのか

一好むをよ。清い水は井戸の水なり。子

後たひるに巫女に頼む事はなす。

然し子か生れよと。その子か丈夫と言つた

に巫女に問ひてその言に從つてとこかの山の

どの本か、その子を養ふ事か。ゆくりと

船の子の場合、いはい。その本は巫女と子

の母か、知つて片ど、又、。而ぬに巫女は一

人か。然し、葛城の祭器は全部供出さ、世に水

と片ど。

子を養ふた、新祝のめ、い、レ、キ、ン、(ムル)、慮、女、P.キ、ン

即ち薬水の鬼神に行つて、あかむ、若く、。此

い、レ、キ、ン、に、新、の、は、子、持、ち、の、め、又、い、は、あ、い、。

○婦人の喫煙館酒

四十才以上の婦人の未亡人になつて居る者

は、飲酒して世人はとかめたい 婦 煙も同然

のやう。四十以上の飲酒して喫煙する者は

遊女位に及ぶ。四五才の婦人の喫煙者も亦同

し、片は若は一部 内 一人か二人かはあ

ないやう。一般に女子は 余り 煙草を嗜む心ない

のと云ふて居る。

〇分家と分居

二三男は昔は結婚して、
さく分家して分居

しての、は、い。分家して、
才を過す

と、あ、あ。長男は、
夫婦、幾、の

銀、同居して、
家、は、困、

片、わ、い、家、は、
夫婦、と

同、し、て、
分、地、は、財、産、か、た、い、人、に、は、向、

あ、あ、あ、あ、
財、産、か、た、い、山、大、体、長、男、か、

金、部、費、つ、て、
我、居、の、家、を、又、は、我、か、建、て、

や、つ、ん、
富、し、い、家、は、二、三、男、の、夫、婦、の、為、に、

取の家の一部を借りてやつた。貸しい家の二

三層の台座してそのほかの家土地を自作

すよ。生宗の田畑を自作す。これは豊後生宗の

二五男である。その時にその生宗に自作料を乞

す。一般に自作料は半にしてある。生宗は初

めよ自作料は幾多他より安い。分家當時自作

にあつては五十倍等には自作に存しよの多

多い。

○ 食生活

主要食物は粟、甘藷、黍、

小麦、抑、宇麻呂。

绿豆

藜、大豆

甘藷

主食物は粟と大豆、餅、小麦、玉蜀黍、

小麦、玉蜀黍、大豆、

しは、（非、粟、小麦、大豆、黍、甘藷、 餅、（小麦、抑、宇麻呂、

ヤウダン、甘藷

は、（白菜、大根、 コ、（小麦、

マ、（油、 油、（白、 油、（白、

も、（ゴマの葉、 唐辛子の葉、（食用、

よ、（肉、 食とし、（牛、 豚、（鶏、

は、（卵、 子や、（鬼、 子、（糸、

。 （知、 し、（肉、 食す、（の、

し、（豆、 用ひ、（供、

し、（豆、 用ひ、（供、

し、（豆、 用ひ、（供、

し、（豆、 用ひ、（供、

し、（豆、 用ひ、（供、

し、（豆、 用ひ、（供、

し、（豆、 用ひ、（供、

料	月	知	た	菓	菓	ト	ネ	ナ
は	吹	し	か	あ	あ	トリ	(根)	ハ
キ	に	近	考	と	と	の	セ	(葉)
ヒ	一	時	途	し	と	寢	リ	ト
て	回	時	以	は	い	込	(葉)	ラ
い	は	時	下	は	ク	合	ト	チ
あ	依	候	の	代	に	し	(根)	根
よ	つ	に	虫	用	依	〜	ス	を
。	〜	な	宋	合	つ	多	ク	用
	尺	つ	の	と	〜	量	(葉)	め
	五	〜	は	は	菓	に	タ	、
	寸	時	は	大	依	依	ナ	夕
	。	候	は	虫	つ	よ	(根)	ん
	今	候	は	宋	〜	。	等	
	依	に	は	下	は		と	
	る	は	。	は	依		あ	
	や	。	各	作	つ			
	い	各	戸	。	。			
	。	近	近					
	材							

〇居位

大抵はオントンの二回と厨房の事。

皆壁井

二回切られし。二回の間に障子の通路

あり。室を二は毛の間に一室を間に他は倉庫兼

作事場なり。や、室を二室は二室を室片

に間に片。

四壁皆赤土にて紙も貼つてある。天井は棟

木や檜の間に赤土にてぬりかゝるなり。席上

には油紙の間にたつ。藁物には三徳あり。

毛ソク(葦束)の間にたつ。アソバ(葦)の間にたつ。

コトヲ、ナナキ(ワンカン)ニシテヨシ。
 大抵毎年一回とシカハ、ナナキ。
 品々上ナリ、アソビヨリ、モソソクハ
 礼儀ノ宗ニ用ル。富ルニ宗ニハモソソクノ上
 ニナナキヲ用ル。
 宗具ハ薄ハ薄(厚)ニシテ、教フトシテ用ル。
 宗具ナシ。服等ニシテハ、此ノ道ハナナキニ
 カイ。可謂ルナリナリ。衣具ハ自製、
 織ノキカケル自製ニシテ、竹カケルカイナ
 又贈入ナリト云々。

廿七